
下僕賞「当選のお知らせ」 （なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為に行われました）

紅雨椿葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「下僕賞「当選のお知らせ」（なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為に行われました）」

【Nコード】

N1609BA

【作者名】

紅雨椿葉

【あらすじ】

一人暮らしでのんびりと生きている男の隣に現れたのは、見たことのない面をしている奴だった。……泥棒？（*お題をFortune Fate様よりお借りしています。目次頁にリンクをしています）（*加えてこの作品は、作者頁に書いてある、ブログで連載している小説の転載です。作者本人によるものであります。）

一人暮らしの野郎のポストに、そんな手紙が入っていたのは、忘れもしない。

鬱陶しい雨の日だった。

世間は正月で、どこの番組を見ているも錦鯉かと思まごう程の鮮やかな着物やらおめでとうございますやら言い合って、非常にお祝いムード。

自由業の俺といえ、何時もと同じように寝転んで、ちよつと奮発したビールとつまみを片手に一杯やって。

年末の大掃除なんてしてなかったから、一息ついたらそろそろ動こうかなんて思いながら、でも後でと先延ばしにしている、自堕落の代名詞とも呼べる代物だった。

しかし、幾ら一人暮らしだとはいえ、生活する以上この状況はいただけなかった。

.....洗ってる皿、なし。
.....洗濯済みの下着、なし。
.....湿気ていないタオル、なし。
.....カップ麺、枯渴。
まずいだらう、コレ。

生活できない。流石に。

よくもまあここまでいろいろ溜めたもんだ。
足を踏む場くらいしかスペースがない。

今まで避難していたベッドも、丁度お茶を零してしまったし。

ああそういえば、洗ってるコップがないのもリストに入るな。
自分ながらに感心する。

これでお袋がいれば、そんなのんびりしてる場合じゃないでしょと怒られるところだが、一人暮らしを始めた頃から一回も連絡を取っていないので、いい加減愛想を尽かされていると思う。

「いや、でも年末に仕事があったからいけないんだよな。大掃除なんてやってられなかったし。一年の疲れを取るために必要な休息だったんだ」

誰に向けるでもなく、ただひたすら現実逃避のために、ひとり言を呟いた。

ちなみに、この惨状をまだ大丈夫だろうと楽観できる勇気は俺にはない。

「仕方ねえ、掃除するか。とりあえず……洗濯機回すか」
補足しておく、我が家は一軒家だ。

都会ではなく、とある県の境にある。家賃が安いことと、窒息しそうに近い家が回りにないことを好んで借りている、ボロいとしか言いようがない、冴えない一戸建てだ。

友人からすれば、庭付きの一戸建てというのは羨ましいのだそうだが、住んでる本人にとっては管理が面倒で仕様がな。

草が生え放題、庭木を荒れ放題にさせておくと、さりげなく家主から注意される。

人の腰くらいにまで草がのびてしまうと、もう廃墟そのもの。

ある意味絶景だ。そうそう見れるもんじゃない。
話がそれた。

つまりは、こんな夜間であろうが朝方であろうが、騒音で悩ますんじゃないかと心配しなきゃならない隣人はいないということだ。

さて、この我が家を綺麗にするためにかかった時間は丸二日だった。

た。

夜に手をつけて、疲れて放り出して、翌日丸一日をつぶしてようやく人を招待できる家となった。

招待する奴なんていないけど。

そつだ。

こんなに疲れきって、そういえば新聞をとってないと外に出たときから、すでに災厄は始まっていたといえる。

建てつけが悪いのが古いせいかなんだか知らないが、軋むドアを押し、寒い空気を被ったというのに。

すつ転んだ。

それはもう、芸人真つ青な素晴らしいすべり。

何だったら見に来て笑いやがれと毒づきたくなるほどの、華麗な回転と尻餅を披露した。

観客がいないのが残念だ。

そつだとも、負け惜しみじゃない。

この目の端に浮かぶのは、雨のせいだ。

羞恥や痛みのせいじゃないとも。

呆然と玄関の前に座り込んでいたのだが、やがて尻が冷たくなってきた。

氷が張っていた。

なんて素晴らしい年明けだ。

痛む腰をさすりつつ、ポストに向かった。

編集者から、友人から、去年三回くらいしか行ってないドラッグストアから、ガソリンスタンドから、動物病院からの付録カレンダーなんてのもあった。

我が家にペットはいない。

それでも組み立てるタイプで、デザインも可愛らしかったので、後で作ろうと眠っていた工作魂がうずいた。

少し高揚した気分のまま、次の葉書をめくる。

有名なファッションブランドの割引券つきの広告。

……半纏姿の、時代丸無視の恰好を笑われている気がして、非常に気分が悪い。次。

腹立ち紛れに、階段を音を立てながら登っていると、新聞の隙間から何かが落ちた。

舌打ち混じりにかがむと、白い封筒が枯れ草の上に落ちていた。

拾い上げて、眺め回してみても宛名だけで、差出人の名前も住所も書かれていない。

「何だあ、こりゃ？」

疑問を口に出した所で返事が帰ってくるはずがない。

とりあえず早く温い部屋に入って、それから中を見てやろうと身を翻した。

すっ転んだ。

「まったく、何だってこんな目に。厄年か、今年は？」

ひやりと襲う言いようのない不快感、微妙な柔らかさが何度味わっても、恨めしい冷湿布を腰に貼ると、思わず短く声を出してしまう。

まったく。

こんな情けない姿、他の奴らには見せられない。

見せるような変態でもないが。

そんなどうでもいいことを考えていると、さっきの封筒を思い出した。

蟬封を模したシールに留められ、さほど厚みはない。

こんな洒落た手紙を送ってくる友人に心当たりはないし、広告でもなさそうだった。

とすると……

考えても埒が明かない。

そう思った俺は、以前誰だったかに貰ったペーパーナイフを部屋から探し出し、ようやく封を切った。

薄いベージュ色の紙に、褪せた黒インクで、二行だけ何か書かれている。

下僕賞「当選のお知らせ」

(なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為に行われました)

「はあ？」

「げぼくしょう？」

「当選したのは嬉しいが、げぼくしょうってなんだ。」

「そのまえにげぼくってなんだっけ。」

「下？」

「え、何。」

「一日だけメイド貸し出しキャンペーン、なんてやってるのか？」

「そもそも近くにメイドカフェなんてあったっけ。」

「でも、それならもう少し早くこれを見たかった。」

「ぴかぴかに磨き上げた家を見て、蟬封されていた封筒が恨めしくなった。」

「いや、しかしメイドとはいえ汚い家に上げるのはどうだろう？」

「人間性を疑われそうだ。」

「と、そこまで考えたとき。」

「人の気配を感じた気がして、振り向くと、人形が座っていた。」

「いや、人形ではなかった。」

「生気に満ちた曇りのない、深いエメラルドの瞳。」

「薔薇色の頬。」

メイプルシロップのような、茶色がかった金の髪。
勝気そうな凛々しい眉。

すっとした鼻、引き結ばれたふっくらした唇。

繊細な指。スラリとした肢体。

細部にいたるまで、何もかもが美しかった。

どんな者からの鑑賞、賛美にも堪えうる芸術品。

こんな陳腐な台詞でどれほど伝わるかは疑問だが。

いや、断っておくが俺は変態じゃない！

変態ではないが……それでも、思わず息を呑み、呆けて
しまうほどの美人がそこにいた。

ぼうつとしていると、人形が眉を片方だけ上げながら問うた。

「お前がぼくの僕か？」

「……男かよー。じゃなくてっ」

僕って、こっちか！

大きな丸い目は髪の毛と同じ、少し茶が入った金でくつきりと縁取られ、俺を見据える目は湖底のように澄んでいる。

眺めている分には申し分ない。

そう、あくまで眺めている分には。しかも遠くから。

こんな間近で見ると自己嫌悪でどん底まで落ち込みたくなる。

この歴然とした差、差、差！

……いいなあ、こんなだったら人生楽しいだろうなあ。

と、俺には縁がない人生を想像していると、美少年はいらいらした口調で聞いてきた。

柳眉をひそめて、美少年にはふさわしくない皺が浮かんでいる。

「聞いているのか？ お前がぼくの僕か、と尋ねている」

「はいはいはい、きーてますよ。これに見覚えある？」

「何だこれ……何て読むんだ？」

例の便箋を見せると、全く知らない様子で自ら手に取っていたが、どうやら読めもしないらしい。

とぼけているつもりか？

ちよつと腹立たしくなって、目の前でゆっくりと読み上げてやる。

「げぼくしょう」

「げぼくシヨ」

一言読み上げて一息つくたびに、たどたどしい口調で俺の真似をして。

「とうせんのおしらせ」

「盗泉のオシラセ」

「なお、ちゅうせんはおうぼのうむにかかわらず」

「ナオチュー線は横暴濃霧二カ瓦ズ」

「むさくいにおこなわれました」

「むさ栗にオコナーれました」

「わざとやってない？」

そう聞くと、わけが分からないといった顔をされた。

そんな阿呆を見るような目で俺を見るな！

「フツーに喋れるのに、音読すると誤変換起こすって、どういう教育環境に……」

半ばあきれ返って顔を上げると、目が合った。エメラルドの瞳。

ああ、そうだった。

「日本人じゃないもんな。会話だけは何とかできるのか。君、名前は何？」

美少年はちよつと渋るように目を泳がし、遠くを見つめ、しばらくするとようやく口を開いた。

消え入るような声だった。

「りっか……」

「リツカ？」

商品名とか、都市名に使われそうなイメージだった。

「チップ」と同じ発音だなとかどうでもいいことを口にしてはいたが、頭は猛スピードで考える。

リツカなんて奴は知らない。

見たところ年は……幾つだよ。俺は日本人でも同姓でも年を測るのは苦手なんだ。

中学生かな。高校生じゃねーだろ。いや、でも日本人は童顔だからそう思うだけでもしかすると小学生……いやいや、何にせよそんなことはどうでもいい。

俺の知り合いにこんな酔狂な真似をする奴はいねーし、知り合い

の子どもは全て把握している。とすると本当に無作為の抽選の結果というヤツか。迷惑極まりないじゃねーか。どこの会社だ！
というかこの抽選の目的は何だ！

心で考えつく限りの罵倒を正体不明の誰かに吐き散らすと、ようやく落ち着いてきて、また他の事を考え始める。

そもそもコイツは何処から入ってきたんだ？

窓が開いていたから、そこからか。寒いんだよこの野郎。窓くらい閉めやがれ。っていうか鍵閉めてなかった俺って凄く無用心だな。まあ一人暮らしの野郎の家に入る物好きなんかいやしな……いるじゃん、ここにっつ。

一人で乗り突込みを続け、また脱線するのを避けるために静かに呼吸を整えた。

待て、落ち着け。

とりあえず重要なのは……

「何で此処に来たんだ？ 誰に言われて此処に来た？」

質問と同時に先ほどまでリツカがいた位置に目をやると、見慣れた家具が映っただけだった。

もしかして夢だったのかと期待半分を探すと、当の本人は「そこそと何か作業をしている。」

あれは……

「あ！ 俺が楽しみに取っておいた付録をっ」

動物病院からのカレンダーを、嬉々とした様子で組み立てていた。俺の非難の声に気づくと手を止め、きょとんとした顔でこちらを見返す。何が悪いのかという顔。ったく、子どもが何でも許されると思ったら大間違いだ。

しかしここで怒鳴るのも大人気ないとしか言いようがないし。

「あのなあ……」

結局、俺は脱力したままそれだけ言うのが精一杯だった。

「ここにいるお前が僕だといわれたから、来た。ここに行けと前もって写真も、地図も見させられた。誰かは……名前が分からない」

急に喋りだした。

それは、さっきの質問に対する答え。

「じゃあそいつの居場所は？」

「覚えてない」

「じゃあ親は？」

「オヤ……いない？」

「何で疑問系なんだよ。ああ、もしかして意味が分からない？ 君を生んで……うーん、君を、好きだといってくれた人、とかいないの？」

俺がさっきまで癩だと思っていた、上から口調はすっかりなりを潜めていた。

自信なさげに、不安げに。

節目がちのエメラルドグリーンは濃くなって、見た目よりも一層幼くみえる。

「……いない」

「不味いこと聞いた？ ええと、ごめん」

非常に気まずい。

そんな暗い過去を持っているとは思えなかったし。

まさかどっかの王家とか貴族とかの末裔じゃないだろうな。

それで、妾腹の生まれで物心ついたときから苛められてきたーとか。

だから親の顔も知らずに今まで

いやいや、小説の読みすぎだ。

確かに王子様みたいな雰囲気だけど、こんな東の島国の、現実主義者が集う経済大国日本にそんなヤツが都合よくいるもんか。

というかその前に此処に来るわけがない。

我ながら馬鹿な発想だとは思ったが、一気に進んでしまった想像にかちりと当てはまってしまふのは、やはり物憂げな雰囲気が漂っているからなのだろう。

とはいえ、いくら何でも此処に来られてもどうしようもないんだよ。

そりゃ目の保養にはなるが、他人に居座られちゃ居心地悪いのは言うまでもない。

冷たいとは思うが、出て行ってもらうしか

非情な判断を下そうとしたとき、リツカがまたカレンダーを手にとるのが見えた。

どうやら気に入ったらしい。

ミシン目の所を切り外すのはどうやら上手くいったようだったが、またさらに細かく切る所は苦戦して、びりつと裂けてしまった。

ああ、もう・・・俺がやってたら綺麗に切れたのに。

それでもなんとか全体を切り終わった。そのころには用紙はあちこちささくれだって、見るも無残なものだ。

そうしてから、差込口のところに紙を入れようとする。

それがまた上手くいかない。

やってやろうと手を伸ばすが、頑として手を離そうとはしなかった。

意地になっているらしい。

先ほどとは違って、好奇心と期待に胸を膨らませている様子を見れば、無理強いする気も起きやしない。

まあいいか。頼り癖がついたら、将来ろくな大人にならないし。諦めてそのまま見守ることにした。作りはじめて約二十分程度。

完成。

どうだとばかりに誇らしげに見せたサッカーボールに似た卓上カレンダーは、お世辞にも綺麗ではなかったけれど、なんだか微笑ましくて、よくやったと誉めてやる。

俺らしくもない。

情を移したら、その時点でもう駄目だ。

なんだかペットみたいな言い草だなと苦笑いしつつ、床に座ってリツカと視線を合わせる。

雰囲気が変わったことに気づいたのが、リツカがテーブルにカレンダーを置いた。

「いいよ。こんな寒い日に追い返すわけにもいかねーし。いずれ誰かが引き取りに来るだろ。それまでここにいるか？ メシくらいなら食わしてやるよ」

リツカは当然だという顔をした、ように見えた。了承したらしく、目を閉じたままゆっくり頷く。あわせて柔らかかそうな髪の毛がふわりと舞った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1609ba/>

「下僕賞「当選のお知らせ」」（なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為

2012年1月4日06時45分発行